EPISODES
心温まる１８のエピソード
社会福祉法人　三幸福祉会　法人設立３５周年記念
２０２２年１０月１日発行

編集／デザイン　村上卓也　三幸福祉会　広報担当
表紙デザイン 挿絵　田中マリナ　https://maribonzu.com/
アニバーサリーロゴデザイン　雨宮三起子　インスタグラム:@amelabo
発行人　池田ひとみ
発行　社会福祉法人　三幸福祉会
〒674-0051　明石市大久保町大窪 3104-1
電話　078-934-0800（代表）
https://seikaen.jp/

社会福祉法人 三幸福祉会
清華苑
miyukifukushikai seikaen

EPISODES

心温まる１８のエピソード

社会福祉法人　三幸福祉会　法人設立３５周年記念
2022

社会福祉法人　三幸福祉会　法人設立３５周年記念

EPISODES

心温まる１８のエピソード

令和４年に三幸福祉会は設立３５年周年の節目を迎えました。この節目にあたり、法人内職員に２度目の心温まるエピソードを募集しました。世間では介護の仕事は重労働で報われることが少ないという評判が多く、求職してくれる人が少ない現状がありますが、実際にはそんなことはなく、介護の仕事に真剣に取り組めばいろいろと報われることも多く、とてもやりがいのある仕事であるということを多くの人に伝え、職員全体でもその体験を共有することが大切であると考えて企画しました。介護に関連する仕事に携わる中で体験した実話を提出してもらいました。

応募総数は実に１７３件に上りました。その後、９人の審査員に吟味してもらい、それぞれ５つのエピソードを選んでもらい集計を行いました。第１次選考で作品を１７本に絞りました。さらに、理事長推薦枠で１作品が追加で選ばれ合計１８作品が入賞されました。

この作品を集めて公開します。この作品に興味を覚えるみなさんには、時間に余裕がある時にじっくり読んで頂き、共感する作品や箇所を是非指摘頂きたいと思います。

２０２２年１０月１日

社会福祉法人　三幸福祉会

総施設長　池田昌弘

最期のことば

特別養護老人ホーム　清華苑
施設長　岩西太一

９３歳のＪ様は食事もほとんど摂ることが出来ず、かなり衰弱し１日のほとんどをベッドで過ごされていました。

奥様へもう長くないことを伝え静養室に行くと、その呼吸はこのまま止まってしまうのではないかと思えるほど浅くて弱いものでした。戦争で満州へ出兵され、終戦後も満州に抑留され、とても丈夫だった身体も今ではやせ衰え往年の面影はありません。それから奥様は毎日、お見舞いに来られていました。

しかし、私の経験上、Ｊ様がもうすぐしゃべることができなくなるのは間違いありません。私はＪ様に

「優しい奥様ですね。感謝を伝えたほうがいいですよ」

と言うと、Ｊ様はニヤッと笑うとプイとあっちを向いて黙ったままいかにも亭主関白らしい素振りでした。奥様は寂しそうにＪ様のほうを見ていました。次の日、Ｊ様は意識がなくなり、しばらくして息を引き取りました。Ｊ様は奥様に「ありがとう」を伝えることなく天国に旅立たれたと思っていました。

ところが、そうではありませんでした。奥様が退去手続きにご来苑された時に、

「あの日ね、私も『ありがとう』って言ってなかったから、主人に『ありがとう』って伝えたの。そしたらね・・・」

Ｊ様は、奥様の帰り際に

「ありがとう……」

と、小さな小さな声で伝えたそうです。奥様は涙で、

「それが、最期の言葉でした。おかげで、主人がこの人でよかったって思って見送ることができました」

奥様はＪ様と結婚して幸せだったそうです。しかし、Ｊ様が自分と結婚して本当によかったと思っているのか、長年不安でもありました。

「ねぎらいの言葉も、褒められたこともなかったから」

それが最期に、Ｊ様が発した「ありがとう」のひと言で、Ｊ様から「いい人生だった、幸せだった」と言われた気がしたそうです。

かけた情けは水に流し 受けた御恩は石に刻む

老人保健施設　清華苑養力センター
介護支援専門員　大中由宣

令和３年７月２０日、祖母が亡くなりました。私にとって小学校二年生のとき以来、近親者の死でした。祖母は通所リハビリ清華苑すいすいを利用していました。

「あんたがおるとこ（清華苑すいすい）に来るのが一番楽しい」

とよく言ってくれました。

介護保険サービスを利用するようになり、約四年。祖母の近くに住んでいましたが、あと何回会えるかわからない、何回一緒に食事ができるかわからない、と一日一日を大切に、少しでも御恩返しができるよう心掛けたつもりでした。それなのに。祖母が亡くなり、棺に入った祖母と対面したとき、一番に抱いた感情は後悔でした。

「大好きだったおうどん、もっと一緒に食べたかったな。」

「故郷の高松に連れて行ってあげればよかったな。」

清華苑すいすいの利用を始める前、いつ会っても祖母はピンク色で薄汚れた、雑巾みたいな割烹着を着ていました。夕方、訪ねると電気も付けずに真っ暗なリビングでテレビを観ていました。

振り返ると、認知症の始まりだったのだと思います。「どこか遠くに行ってしまう」、そんな不安から清華苑すいすいの利用を勧めました。清華苑すいすいに行くようになり、久しぶりに洋服を着る祖母に会いました。趣味だった社交ダンスでワルツを踊ることができました。

「かけた情けは水に流し 受けた御恩は石に刻む」

これは、祖母に教えてもらった大切な言葉です。高齢者施設を利用するご利用者、その一人ひとりからの御恩を心の石に刻んだ方々、ご家族はご利用者の日々の生活の幸せを願い、私たちはその担い手です。

福祉サービスはご利用者本人だけでなく、ご利用者家族の支えになります。祖母に幸せな居場所を与えてくれたことに感謝しています。入職したときから今までずっと、福祉の仕事は私にとっての天職だと胸を張って言うことができます。

「大切な家族が清華苑を利用してよかった」

そう思っていただけるよう私自身の天職を通じてご支援ができればと考えています。

想いに耳を傾けて

グループホーム　清華苑ポートピア
介護員　小嶋綾子

女性ご利用者のM様がグループホームへ入所されたのは８９歳の時でした。普段からご自分のお部屋で過ごされる事が多く、とても無口な方でした。

ある日の事、M様の入浴介助をしていると、M様は、自分の履いている紙パンツをじっと眺めて、小さな声で…

「これ汚れたらすぐ替えられるし、皆も同じこのパンツ履いているの？」

「これ赤ちゃんと一緒のパンツね…格好悪いね…」

とそうつぶやかれました。その表情はとても悲しげで寂しそうでした。M様がその思いを打ち明けてくれた時、私に出来ることは何だろうかと考えました。

私はM様の理想のパンツへ向けて、各職員へ意見を求めました。意見は賛否あり、

「紙パンツの方が安心ではないか」

と心配する声もありましたが、先輩職員から

「M様の気持ちを考えて布パンツでやってみましょう」

と背中を押して頂きました。早速、新たに購入した布パンツを手にしたMさんは、大きく広げて、

「ええわ～レース付きやね、見てみて～赤ちゃんと違うね～大人やね～」

とキラキラと目を輝かせて、とても喜んで下さりました。

それからのM様は表情も明るく､皆が集まるホールで過ごすことが多くなり、とても活動的に過ごされました。

ご利用者一人一人の想いに耳を傾けて、その方にとって本当に価値あるサービスをこれからも提供して行きたいと思います。

パパはかっこいい

通所リハビリテーション　清華苑すいすい
介護員　鎌田紘輔

数年前の出来事ですが、家族で外出中に子供がトイレを我慢できずに車の中でお漏らしをしてしまいました。妻に子供用のパンツを急いで購入してきてもらい、トイレで着替えをしている最中のことでした。仕事で更衣介助をおこなっているので何気なく子供の着替えの手伝いをしていると、子供から、

「パパかっこいいね」

と言われました。

子供からすれば私の仕事がどうとか思わずに、ただ手際の良さを見て、感じたままを言ったのでしょうが、私が今まで介護の仕事を続けてきたからこそ出来たことです。

このような場面で日頃の仕事を活かせられるとは思わず、ご利用者に感謝されたときと同じ様に子供から言われた言葉に心うたれました。

介護の仕事を始めて１３年目。介護という仕事に更に誇りと自信をもてるようになった１日でした。

お見送り

特別養護老人ホーム　清華苑
介護員　久保田千里

４年前に入所されたご利用者Ｓ様とのエピソードです。Ｓ様はお話し好きな方であり、入所当時から私の名前をすぐに覚えてくださり、いつも楽しくお話しさせてもらっていました。Ｓ様は、いつも私の次の出勤日時を聞いてこられ、３階ホールの駐輪場が見える所まで車椅子で出て来られ、３階から手を振って待って下さっていました。出勤時には、

「今日も元気に来てくれてありがとう」

退勤時には、

「今日もお疲れ様、帰り道気を付けてね」

と言ってくださいました。そんな温かい言葉だけで十分嬉しかったのですが、いつもホールまで出て来られ、待っていてくださったり、見送ってくださる行動に、「今日も頑張ろう！」と思うことが出来ました。

９０歳を過ぎご高齢ということもあり、遅い時間にホールまで出てきてもらうのが申し訳なく感じ、帰り際に、

「今日はお部屋にいてくださいね」

と言った日でも、駐輪場でふと３階ホールを見上げると、部屋から出てきておられ、いつものように手を振ってくださっていました。

「いつも安全に帰れるように祈ってるんやで」

と言われ、申し訳ないという気持ちの反面とても嬉しくも思いました。

そんなＳ様との別れは突然でした。私は夜勤で出勤し、

「今日は夜勤なので、何かあったらいつでも呼んでくださいね」

と声を掛けました。

「心強いわ、よろしくね」

と言われたのが最後の会話になり、その１時間後に息を引き取られました。エンゼルケアでＳ様のお身体を綺麗にしている間も実感がわかず、私は涙が止まりませんでした。一緒に過ごした２年半の時間はとてもかけがえのない時間となりました。

もうすぐ２年が経とうとしている今でも、駐輪場に行くと３階ホールを見上げてしまいます。そんなＳ様から学んだ「人を思いやる温かい心」をいつまでも持ち続けていきたいと思います。

誇り

特別養護老人ホーム　清華苑
介護支援専門員　前川真弓

私がパートとして介護員をしていた３年目、ご利用者のＳ様と出会いました。Ｓ様は、お身体が不自由で全介助のご状態ですが、昔の話を楽しく話すことが出来るのは何故だろうと不思議に感じていました。

話が一段落すると、

「したいことは行動を起こさないと始まらないから」

といつも口癖のように言われていました。殆どベッド上で過ごす時間が多いＳ様は、まだまだやりたい事や楽しみたい事がある様子でした。それを考えて一日一日が過ぎて行っているのかと思うと、私は胸が締め付けられる思いでした。

ある時、Ｓ様が

「あなたはいつも同じことを話している私の話を、毎回初めて聞くかのように楽しそうに聞いてくれるのが今の私の楽しみなの。こういう事もおむつを交換するのと同じくらい私にとって有難いのよ。他の人にもこういうお世話をしてあげてね。あなたは今からどんなに悪いことをしても天国にいける職業に就いているんだから」

と話されました。パーキンソン症候群で顔の表情をあまり変える事が出来ないＳ様ですが、私には笑っているように見えました。

私はコミュニケーションの大切さをわかっていないまま介護をしていましたが、Ｓ様に出会い、認知症になったご利用者も、身体が不自由になったご利用者も、今だけでなく過去をしっかり生きてきたという事を理解する事ができました。そして、介護の知識をもっと深めていきたいという想いになり、介護をする楽しさを知り、この仕事に誇りを持つ事ができました。

Ｓ様が辛い状況で生活している中、私の為にいろいろと話してくださり学ばせていただいたことを忘れず、これからもご利用者としっかりと向かい合い、コミュニケーションをしっかり図る事を念頭においてケアをしていきたいと思います。

手から伝わる想い

老人保健施設　清華苑養力センター
介護員　柴田ありさ

「手話をしませんか？」
と耳が聞こえないＫ様に言うと
「覚えられる頭じゃないし、手もそんな動かんから恥ずかしい」
と断られました。
「ではまたいつかやりたいと思ったら教えてください。でも１つお願いがあります。この手話だけ覚えてください。『ありがとう』です。Ｋ様にありがとうって手話で伝えますね。」
と言いました。
　そして１週間ほど経った頃、Ｋ様が、
「柴田さん見て！いつも・・・」
と手話で『ありがとう』をしてくださったのです。目が丸くなりました。ありがとうの気持ちさえ伝われば、と思っていたのにまさか、と。そして
「私も覚えようかしら、手話教えてくれる？」
と言ってくれました。それから余暇の時間を使って２人で楽しく手話をしました。
「手話って面白いね、成り立ちを聞くのが楽しい！手のリハビリにもなるね。」
と話されました。そう思ってくれたことが嬉しくて嬉しくて。そしてＫ様が私に手話でありがとうを伝えてくれる時、いつも満面の笑みなのです。この笑顔に何度心奪われたことでしょう。
　物心ついた時から吃音がある私。いつか役に立ったらと学んだ手話。吃音がなかったら手話を学ぼうと思わなかったかもしれません。吃音があってよかったと初めて思いました。そう思わせてくれたのはＫ様の手話を使って笑顔でありがとうと伝えてくれる瞬間です。ありがとうは私の方。一緒に手話をしてくれてありがとう。出会ってくれてありがとう。そしてこれからも一緒に沢山手話を勉強して、お話ししましょうね。

ＴＯＫＹＯ

特別養護老人ホーム　清華苑
介護員　藤原亮太

　９年前、夜勤で巡回中にご利用者のＩ様の居室のテレビで「２０２０年のオリンピック開催地が東京に決定しました！」というニュースを見て、Ｉ様と一緒に興奮して喜んだことを今でも思い出します。
　当時９０歳を超えていたＩ様は
「まあでも、オリンピックの時にはもう私はいないけどな」
と笑って話されていました。
「一緒に観戦しましょうね」
と言葉を掛けましたが、オリンピックイヤーにご存命であれば１０３歳という年齢。一緒にその時を迎えたいという思いはありましたが、年齢を考えると難しいかなと当時は感じていました。
　そして、迎えた２０２０年の夏、Ｉ様は以前のように自分で車椅子を操作したり、趣味の裁縫をすることは出来なくなりましたが、１０３歳という年齢を迎えることが出来ました。Ｉ様にオリンピックの話をすると
「そうやったかな」
とマイペースにお答えされ、覚えている様子はありませんでした。
　残念ながら新型コロナウイルスの影響でオリンピックの延期が決まり、その年の秋にＩ様は天国に旅立たれました。一緒にオリンピックをＴＶ観戦することは叶いませんでしたが、Ｉ様と共に過ごしたひとときは、とても幸せな思い出になりました。
　翌年、東京オリンピックが無事開催されました。たくさんの感動や刺激のあったオリンピックでしたが、時が過ぎても私の中では「東京オリンピックといえば、Ｉ様」の印象が色濃く残りそうです。きっとＩ様も天国で「東京オリンピック」を楽しまれたことと思います。

家族の絆

老人保健施設　清華苑養力センター
看護師　富田博子

コロナ禍の今、感染終息が見通せない中、面会が制限される状況が長期化して大切なご家族との時間を過ごすことも困難になっています。中でも、看取り期のご家族にとって次第に老衰していく姿と向き合うことは、やがて別れの時を迎え、少しずつ受け入れるために大切な時間です。

面会が制限される状況下、看取りをさせて頂いたご利用者のＦ様にお別れの時が迫ったことを長女様にお伝えするとすぐに来苑され、Ｆ様の傍に座ってじっと見つめて数時間を過ごして帰られました。思うように面会できないこの状況で、ご家族は傍に居たい、手を握りたい、声をかけたい、とつらい思いをされていたことがうかがえました。私は、長女様がＦ様に何かしてあげたいと思っておられると感じ、

「職員がお手伝いしますから、お風呂で背中を流して、気持ち良くしてあげませんか」

とお声掛けをしました。すると長女様は、

「是非させて下さい。家にいた頃から背中を流そうかと何度も言ったことがあったけれど、大丈夫と言って一度もさせてくれなかったので、今日初めてできます」

と話されました。

長女様にとって初めてのお母様の入浴介助をＦ様が入所された時からの馴染みの介護員や看護師がお手伝いしました。マスク越しの長女様のお顔は終始笑顔で、Ｆ様を見つめ、声をかける様子に、お母様に対する強い思いと家族の大切さについて考えさせられました。長女様がシャワーを掛けて声をかけた瞬間には両目をパッチリ開眼され、長女様による初めてのお風呂のお世話は、感動の瞬間となりました。

Ｆ様と長女様の触れ合いの時間が持てたと共に、職員の心も洗われ温まる時間となりました。この機会を与えてくださったＦ様と長女様に感謝します。

あんたは全然優しくなかった

通所リハビリテーション　清華苑すいすい
介護員　竹内崇

私が清華苑養力センターに在籍していた頃の話です。病院を退院して、清華苑養力センターに入所された女性のＡ様は、腕に強い痛みがあり、転倒への恐怖心や不安感が強い方でした。

「頑張って子供たちを育てたのに、子供たちから家へ帰ってくるなと言われてるようなものや」

とネガティブな発言もみられました。

私は、Ａ様が安心してリハビリに励めるように毎日の挨拶やポジティブな声掛けを行いました。少しずつ信頼関係が築けると、

「ちょっと自分で頑張ってみるわ」

と話されることも増え、介助が必要であった起居動作もやがてはひとりで出来るようになりました。自信をつけたＡ様のリハビリは順調に進み、徐々に表情も明るくなりました。

いよいよＡ様の在宅復帰が決まり、退所当日は、他の職員と一緒にエントランスでお見送りをしました。Ａ様は、他の職員には、

「優しくしてくれてありがとう」

と話されていましたが、私には、

「あんたは全然優しくなかった」

と言われました。私は悲しい気持ちになると同時に胸が痛くなりましたが、その後にＡ様は続けて、

「けどな、あんたが一番私のことを考えて面倒みてくれてたのはわかるよ。あんたがいつも応援してくれたからこんなに元気になって家に帰れる。あんたのおかげやで。ありがとう」

と言ってくださいました。

私は嬉しい気持ちで胸が熱くなりました。そこには今までに見たこともないようなＡ様の素敵な笑顔がありました。Ａ様の支援を通して、在宅復帰支援の醍醐味を感じる貴重な経験をさせていただきました。

ロビーから伝わる家族愛

老人保健施設　清華苑養力センター
事務員　服部英子

最近はコロナ禍で面会することは簡単ではありませんが、以前はたくさんのご家族が面会にいらっしゃっていました。事務所で仕事をしていると、ロビーで面会されている会話が聞こえてきます。

Ａ様の息子様は、面会のたびに擦ったリンゴを差し入れされていました。きっとＡ様の好物なのでしょう。Ａさんは、

「あんたも食べ、美味しいよ」

といつも息子様に勧めていました。息子様は、

「いいから全部食べ」と答えます。するとＡ様は、

「全部食べていいの？美味しいよ、いいの？」

と、とても喜ばれていました。母を想い、母の好物を差し入れする息子様と、息子様へ「あんたも食べ」と必ず声をかけるＡ様。お互いがお互いを想う気持ちが伝わってきます。

Ｂ様は、息子様が面会にいらっしゃった時に、

「あんたのおかげで、私は何の不満もなく、楽しくここで生活できています。ありがとうね」

と必ず伝えていらっしゃいました。

私にも２人の息子がいます。私だけでは経験しなかっただろうなと思うことも経験でき、息子のおかげで今までの人生は楽しかったと思っています。でも、それを伝えているか？と考えると、ほとんど伝えていません。

心で思っていても、Ｂ様の様に言葉にして伝えなければ伝わりません。Ｂ様が感謝の気持ちをいつも言葉にして伝えているからこそ、あんなに素敵な親子関係が築かれたのだと思います。いくつになっても親は子を想い、そしてまた子も親を想う。そんな素敵な光景を見るたびに、私自身が温かく優しい気持ちになっていたことを思い出します。

相手を想う気持ちや感謝の気持ちを伝えることは、人間関係全てにおいて大切で必要なことです。その大切なことを当たり前にできる人が増えると世の中はもっと平和で生きやすくなることでしょう。Ａ様やＢ様のおかげで『生きていく上で大切なこと』に改めて気づくことができました。まずは身近な人に『ありがとう』を伝えようと思います。

願い叶える在宅復帰

老人保健施設　清華苑養力センター
支援相談員　酒井渉

女性ご利用者のＡ様は、コロナ禍でご家族と直接の面会が出来ない為、ご主人とビデオ面会をされていました。その時、画面越しのご主人に向かって、

「その声はおとうさん？元気か？わたしは大丈夫やで。でも、おとうさんにあいたい。おとうさんのつくった野菜を食べたい。目はもう見えないし、おとうさん、ずっと傍におってよ」

と話しかけられて、ご主人も涙を流されていました。

私はこのやりとりを聞いていて、今何とかしてあげないと後悔する気がしました。家に帰してさしあげたい気持ちがあっても、健康面やいつまで介護が続くのかわからないなどの不安もありましたが、在宅復帰を提案してみることにしました。ご主人は、

「コロナで本人に会えないほうが辛い。在宅介護を頑張る！」

と言われ、在宅復帰を決意されました。

万が一、在宅生活の継続が難しい時は、再び入所する事が出来るように体制を整え無事在宅復帰されました。しかし、数日が経ったある日、担当ケアマネジャーからＡ様が亡くなったという事実を知らされました。ご自宅へ伺い、お線香をあげさせてもらった時、飾られていたお写真にはお元気な頃におしゃれな衣装を身にまとった、笑顔のＡ様が写っていました。

ご家族より、

「最期は眠っているだけかと思ったぐらいに穏やかな表情でした。本人が家に帰れたのに満足して、私たちに負担をかけまいと気を遣ったのかはわからないけど、介護の期間が長期化することもなく負担に感じませんでした。余命宣告を受けた以上に生きながらえたのも清華苑養力センターのケアがすごく良くて、本人も居心地が良かったんだと思います。そして家を最期の場所にすることができて本当に良かったです」

と感謝の言葉をいただきました。

支援相談員の仕事に改めてやりがいを感じると同時に、清華苑養力センターで働いているからこそ経験できたことをとても感謝しています。

最高の褒め言葉

居宅介護支援事業所　清華苑ケアガイドステーションⅢ
介護支援専門員　大西絵里子

１０年前、担当するご利用者の夫であり介護者であるＯ様と出会いました。小学校の校長先生まで務め上げたＯ様は、奥さまの介護だけでなく家のこともきちんとされていました。趣味の囲碁教室に通い、清華苑の施設で行事があれば足を運び、法人が主催する男の介護者サロンにも顔を出してくれていました。なかでも清華苑のヘルパーさんが作る食事を何より楽しみにされていました。そして、３年後、奥さまの介護が終わりを迎えました。

「清華苑さんにはお世話になりました。ワシに介護が必要になってもあんたと清華苑に世話になりたいと思ってる」

という最高の褒め言葉をいただいて、その後に私は産休に入りました。

その後、職場復帰し、何度かの異動を経た平成３１年４月にＯ様から１本の電話が鳴りました。

「男の独り暮らしは食事の用意が大変や。清華苑のヘルパーさんに食事を作りに来て貰いたいんや。他のことは何とかするから」

というＯ様の依頼を受けて、介護保険の申請手続きを行い、ヘルパーを調整しました。

令和３年、９４歳になったＯ様は今も独り暮らしを続けています。徐々に物忘れが見られ、電話のやりとりや緊急訪問の回数が増えてきましたが、これからも奥さまとの思い出が詰まった大久保で１日でも長く生活を送る事が出来るよう、Ｏ様の生活に寄り添い、支援させて頂きたいと思います。

再開。そして再会

特別養護老人ホーム　清華苑
介護員　吉田健介

事務所を出ると、

「撮れてる？」

「いや音が鳴っていないから撮れてない！」

とご利用者とご家族の声が聞こえた。久しぶりの面会の再開でご家族が正面玄関でご利用者と写真を撮られていた。ご家族が、ご利用者と久しぶりに対面出来たことのうれしさが私達職員にも伝わってくる。

「こんにちは。ご無沙汰しています。お写真一緒に撮りましょうか？」

とご家族にお声を掛け撮影させて頂いた。撮影した写真を確認するご家族の横顔は優しい雰囲気に包まれていた。

「やっぱりＴＶ電話では反応があまりわからなかったので、会うのとは違いますね。いつもありがとうございます。大変な状況ですが、頑張って下さい」

と感謝の言葉を頂いた。

ご利用者は、ご自身の意思を伝えることが難しい。その中でもご家族はご利用者に話しかけ、返答はないが、ご利用者はじっとご家族を見ていた。その光景を見ながら、素直に「会えてよかった」と思い、心の奥が温かくなるのを感じた。

いつもあった当たり前はコロナ禍の中で大きく変わった。しかしこの環境下でご利用者、ご家族、働く職員、地域の為に私達は何ができるか。その想いをどのように形にしていくか。まだまだやるべきことがあると感じている。

ご家族と会えない状況下の中でもみんなで一緒に出来る限りのことをやってきた。しかし今回、ご家族と顔を合わせること、会話をすること、この瞬間こそがとても大切な時間である事を強く感じた。ご利用者とご家族が一緒に撮った写真が双方にとって良い思い出の１枚となることを願う。

苦節を乗り越える

老人保健施設　清華苑養力センター
調理員　坂井明美

私が清華苑に調理員として勤務して２３年が過ぎようとしています。その間には、様々な喜び、苦労、経験、感動がありました。春夏の早い時間の出勤時に目にした朝焼け、秋風の凍りつく様な真っ暗な寒さの中でひときわ綺麗に輝いていた星、ひとりで朝食の準備に取りかかるのはたいへんな重責でした。そして昼食、夕食とご利用者に安心と安全なお食事を提供させて頂くことをモットーとして、調理スタッフ全員が同じ想いを共有しながら頑張っています。

今年に入り、ご利用者のＨ様が百才を迎えられました。お祝いの言葉をお掛けした時、Ｈ様が

「ここの食事はどれもおいしいから元気でいられる」

とおっしゃいました。

私は頭の下がる想いと感謝の気持ちでいっぱいでした。故郷の施設で元気に過ごしている私の母も丁度百才で想いもひとしおでした。

ご利用者が退所された後、ご家族から心あたたまる感謝のお手紙やお言葉を頂いたり、職員の方々が検食カードに書かれた文面などはどれも心に響く力強い言葉で、それらは全て心の支えとなり、心満たされる想いになります。

これからも前向きな気持ちで仕事に取り組んでいきたい、職員同士がお互いを想いやる心溢れる職場でありたいと願っています。

るりとして。涼として。

特別養護老人ホーム　清華苑
介護員　橋爪涼

私のことを「るり」と呼ぶご利用者がおられます。本当は違う名前なのですが、私が姪御さんと重なっているようです。出勤して挨拶をすると「昨日もその前もおらんかったんやろ。体調崩したんか思って心配したんやで」と手を握ってくれます。認知症が原因で記憶することが難しい時もあるのに、私が連休だったことをしっかり覚えてくれていた事に驚き、嬉しくも思いました。

このご利用者は過去の悲しい思い出がよみがえり突然怒ったり泣いたりと気分のムラがあります。そんな時、私は隣に座りながら話を聞いたり、エプロン配りやシーツの交換を手伝ってもらったり…と一緒に時を過ごします。

「寂しいなぁ、辛いなぁ」

という思い出を話して少し気持ちが落ち着くと

「るりが嫁にいく時はえぇ着物を買ったるからな」と眉毛をハの字にして笑ってくれました。

認知症のあるご利用者は感情のまま真っすぐに私たちへ接してこられ、時にそれは大きな愛情であることも。出勤したら「おかえり」と迎えてくれる温かさに私はいつも支えられています。

私にとって清華苑は職場ですが、ご利用者にとっては生活の場です。特別なことはできなくても、ご家族と他人の間である介護士として、毎日のケアの中で温かさを届けられたらいいなぁと思っています。

はじめてのエンゼルケア

老人保健施設　清華苑養力センター
介護員　長田和真

認知症のあるご利用者Ａ様。毎朝、起床後に車椅子を操作してサービスステーションに来られ、棚に保管している自分の化粧ポーチを取り、お化粧をされる事が日課でした。

重度の認知症を患っておられましたが、昔からの日課であったお化粧をする手順に迷いはなく、真っ赤な口紅と頬のチークをかかさず、いつも身だしなみを綺麗に整えておられました。しかし、Ａ様は少しずつ認知症が進行し、体力も低下していき、いつしか日課であったお化粧も出来なくなっていました。

Ａ様の状態が良くない日々が続いたある日、夜勤の巡視に行くと、Ａ様は既に息を引き取られていました。清華苑養力センターでは「看取り」の対応が少ない為、私自身もエンゼルケアの経験はありませんでした。不慣れな私は看護師と２人でエンゼルケアを行い、Ａ様のお身体を綺麗にさせていただきました。

普段は化粧をしたことがない男の私ですが、不慣れながらも一生懸命にお化粧を施し、お見送りさせて頂きました。その時、どのようにお化粧したかは緊張のあまり覚えていませんが、ただ１つ覚えているのはＡ様がずっと使っていた赤色の口紅に似た口紅を薄く塗ったことです。

Ａ様をお見送りして数日経ったある日、上司から

「Ａ様のご家族がお化粧姿を見て、昔の姿を思い出すと言って喜ばれていた」

と伺いました。ご家族の希望があればお葬儀屋さんでも湯灌をするそうですが、Ａ様のご家族は私達が施したお化粧のままで最後をお見送りになったそうです。

これからもご利用者やご家族にとって安心出来る介護を提供していきたいと思います。

この手で人を笑顔にする

グループホーム　清華苑
介護員　中川莉緒

「ありがとう」この言葉をご利用者に言われると祖母を思い出します。

私は、元々福祉の仕事を目指していたわけではありません。祖母が調理師だったこともあり、祖母に憧れて幼いころから調理関係の仕事に就くのが夢でした。中学高校では、福祉とは関係のない調理と栄養学について学び、学校から帰ってくると祖母と夜ご飯を作る、それが私の楽しみでした。

「あんたは料理してる時が一番楽しそうやから、その手でいっぱいの人を笑顔にできる」

そう言われた事が嬉しかったのを今でも覚えています。

そんな私に進路直前に転機が訪れました。それは病で祖母が亡くなった事です。私は、祖母が危篤状態だと学校で知らせを受けた時、泣きながら教室を飛び出し、祖母に会いに行きました。しかし「ありがとう」と直接言う間もなく祖母は逝ってしまいました。

それから、どこか心に穴がぽっかりと空いてしまい、気づけば毎日、朝起きて学校に行って、家に帰って寝ることを繰り返す日々でした。時は流れて徐々に元の生活に戻りつつある中、ふと祖母に言われた「その手で人を笑顔にできる」という言葉を思い出しました。

私は、もう一度将来を見直し自分は何になりたいのか、何がしたいのか考えました。あの時、祖母に何もできなかった後悔、そしてこの手で誰かを笑顔にしたい、その一心で福祉の道に進むことを決めました。

介護は思っている以上に大変な仕事です。でも、「ありがとう」という言葉を頂く度にやりがいや感動、仕事の楽しみをたくさん感じています。形は違うけれど祖母と約束した「この手で人を笑顔にする」という事を実現できるよう、ご利用者の方と同じ時間を共に過ごしています。

最後に天国にいる祖母に伝えたい事があります。

「おばあちゃん、わたしの夢叶ったよ、ありがとう」